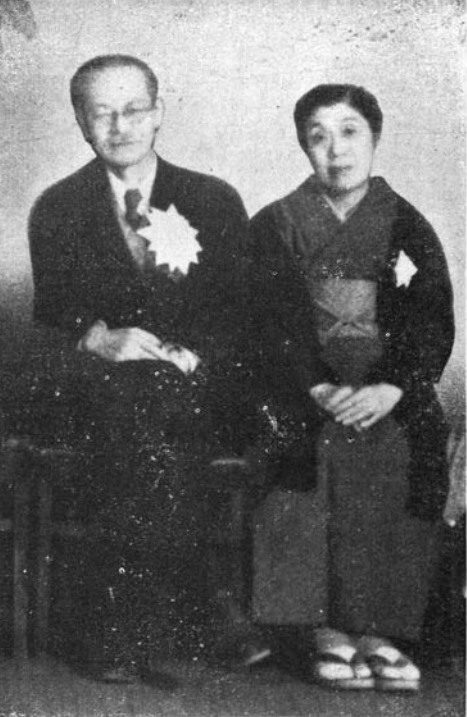


麻生葭乃句集

福壽草

川柳雜誌社版



福寿草
松うしたぶそろかりこ
芳乃

（年九廿和昭）郎路こ替著



(年二十正大) 女長と著者の代時神阪

序

明治末葉の女性川柳家で今日まで続いているのは僕の記憶では葎乃ぐらいなものである。葎乃にしても僕と結婚していなかったら遠うの昔にやめていたのに違いない。

明治時代には大たい女性短詩型文学では短歌へ走った。葎乃と同郷の与謝野晶子などもその一人だ。次は俳句、詩という順序で、川柳を作る女性と言うと変な眼で見られるような気がして手をつけるのを惧れたようだ。と云うのは川柳は例の三要素時代で、嫁や姑の対立した句を見せられていたし、何れはそ

の嫁にならなければならぬ女性が、人情の機微を穿つと云う川柳に手出しをして、世間を白眼視したような句を発表しようものなら、その前途がどうなるくらいなことは想像に難くなかったからである。川柳は面白いには違いないが、作らずにはいられないと云うほどの欲求もないから、やめておくにこしたことはないと敬遠されたのである。そんな理由で闊秀作家は百人に一人もいなかったと云つてもいい。少し作れるようになり、多少名を知られるようになったところで、結婚と同時に消えてしまった。兎に角二三年で飽きるか、結婚によって後を絶つか、何れにしても永續しなかった。今日でも矢張り斯うした傾向はある。

葭乃はそんな時代に生れた作家である。父の河盛芦村が俳句も作れば川柳も作っていたので、一緒に句会などへも出たのであった。従つて私と結婚するまでは世間並みに柳樽に近い句風の句を作っていた。私と結婚したのは今から四十二年前の大正三年の春であるが、私は明治四十二年頃からは新らしい傾向を

目指して作句していたので、大正四年に私が刊行した「雪」の作風にはなかな／＼なじんでくれなかった。

「雪」の作風と云えば

Sofa が欲しという妻のうらわかく

や

妻や待たん靴音を高めんか

と云ったように、新婚当時の私の心境をズバ／＼と詠んだもので、柳樽の客観句とは全く趣きが違っていたのである。そして柳界からアレは川柳ではないとか、新傾向句だとか云われて異端視されていた。葭乃にしても、はじめは私等の句風に近づかなかったがいつのほどにか私等の流れに投じて来た。有名な呑んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ

や

福寿草松に従いそろかしこ

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと

等々々、自己の環境や思想を忌憚なく句に反影させて来たのである。

大たい私は川柳が男性だけのものでないことを早くから説いた。川柳の社会化を提唱した立場からも、私の主宰する「川柳雑誌」で、早くから女性作家のために、葭乃の選で女性作家の欄を設け、女性作家の養成につとめたものである。そして今日では女性と男性の間の一線を排してしまったほど「川柳雑誌」では女性の進出を見ている。従来、女性作家の雅号と云えば何女とか何子とかであって、女性であることが大たい判明したが「川柳雑誌」の女性作家は既にそうしたマンネリズムの雅号から脱出した人たちが多い。葭乃、梨里、白香、湖月、茶々、若菜、ひさみ、梨花、阿茶、風の子、千代美、定美等々々幾らでもある。「川柳雑誌」の近作柳樽欄を見ても、男性を圧して多数の女性が活躍していること

を思えば、川柳に於ては既に男女の知性の問題は解決されていると云えよう。

次に、この句集を読まれる人達のために極く簡単に葭乃の性格や句風について述べておこうと思う。

葭乃の性格は内剛外柔である。だから誰にでも一応よい奥さんとして認識されている。従って敵というものがない。時にはキリスト教の殉教者のように、彼の女の持ち味だと思われる内剛すら、教養の力で抑圧しているようである。

このあらわれが、私に対しては「福寿草松に従いそろかしこ」になったのかも知れない。しかし、民主主義がどうの斯うのとも云わないし、男女同権も振り廻わさない。ただ牡蠣の如く黙りこくって我が道を行く彼の女は、それで充分に幸福を感じているらしい。一見東洋的な諦観的なげやりの態度にも見えるが、それは彼の女の無口のせいであって、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の句に親しく接したら氷解するであらう。彼の

女は常に目立たない存在ではあるが、いつか峠を越している蝸牛のように、一分刻みの前進をたゆみなく続けているのである。

葭乃の近来の句風にはフイクシヨンのない叙情詩的な作品の多いことが、その特徴だと云えよう。

彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静的な日々に安住し切っていて、社会に対する抗議とか公憤とか云ったものを持ち合わさない。従って句の上に、そうした嚴びしさ、激しさと云うものはない。その点、すべてに於て私と対蹠的である。私が彼の女と、私の人生の大半を共に歩むことの出来る根がそこにあるのかも知れない。

終りに彼の女の健康を祝福し、この句集の句の永生を祈って筆を擱く。

一九五五・六・一七日

福壽草

十七字我等の国語なるぞかし

初日キラ／＼

網は殺生忘れてる

数の子のみんなを育てばすごかろう

松の内ダークサイドのない飲手

福壽草松にしたがいそろかしこ

釘ずけにしても門松たてたがり

松竹梅松は母家という形

節約の床葉牡丹が活けられる

松の内まだ一軒を飲み残し

返信でくだ巻きかえす飲仲間

三ヶ日爛番をしただけのこと

屠蘇機嫌らしい追補のある賀状

飲むほどにもう初雪のかげもなし

初風呂へ冬の姿で来て目立ち

門松は無用常住座臥の門

散髪屋すぐにもかかるように云い
剃りに来て意外にうつる襟と知れ

記念品社名れいれいしくきざみ

印刷屋もめて来るほど春近し

秋ざくらあまりに堅きペン皿や

コスモスに風あり友の書斎見ゆ

牡鶏が来て鶏頭のまぎらわし

ちよぼ

ちよぼ

ちよぼ

ちよぼ

ちよぼと咲く女郎花

揚花火散つた姿の曼珠沙華

尺あてて見れば暴君揃いなり

十三荷里で死ぬとは知るまいが

云いまして又鏡台へ向きなおり

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ
お帰りにならず 刺身も色かわる

夕立は小気味よし

君が叱咤も

癩癧がつゐる障子の家へ住み

放課後は苺のへたを取る仕事

相談をしてひとしなをはぶく膳

氣を變えて雲は東へ流れ出し

雀来よ来よと

伸びる屋根の草

池に鶴残して一家都落ち

住吉の馬と生れず馬力曳く

信心の茶店かしわのすきもあり

もう駅が見える坂まで下つて来

幕の内一寸はさめばくずれそう

鐘がひびかぬ大都市の淋しさよ

七夕に鬼灯のない笹を持ち

別府染とうぐい縫わず夏がすぎ

しみぐと心培う部屋もなし

一生に自分の部屋というが欲し

墓口も襟も子供の拂い下げ

睡眠剤に酒をゆるされ診察通過

「HEALTH」見てまだ生きのびる慾を出し

生きることによりきめて頑固を立てとおし

われ充てり 充てりと

裏の菜種咲く

葱畑みなくすだまをさし上げて

内なりという瓜もみのほろにがく

手をのべた袖の下にもつくくし

早咲きの土堤はマツチの消える風

片便り彼岸櫻が淋しうて

糸瓜もう水をとられる風と知り

へちま　へちま

ここは行水するところ

瓜もみがはなれへ匂い灯がともり

ねんねこと仲よい冬を続けて来

帆立貝人手貝など子に教え

児を寝かしてから天下を寝てしま

夕櫻ここが終いの法界屋

出語りがあるかと思う櫻の灯

花の留守あてがいぶちの酒に酔い

鳳仙花竿の雫のかかるところ

錦魚草プチブルとまでゆかぬ庭

浴槽へずらり立つたは皆わが子

木綿着の心安さよ子と眠る

かざ雲が出て来た

ねんねこ着よう

子を置いて朝湯へ来るも五年ぶり

鉛筆のダスいつの間か子にとられ

長女だけ母のさばきが気に入らず

奥さまはおひままがきの孔雀草

指図するだけのマダムの土いぢり

スカートピーの弱さ突支棒が要る

木像にすがる強さを女房持ち

子が出来て床の飾となつた琴

明けがたの夢を気にせず肥えている

回覽板へまた判のないうるさ型

うるさ型こんな雨でも出席し

銀狐夫はキャプテン空と水

訓導の余技ワンオール トウーオール

ごもくあさが君に似ていたとも云えず

若く云えば帽子を脱いで見せるなり

百姓のゆつくり返事書くときめ

二代目の拍手なるぞ正一位

おもわくのある神棚のお供えや

林檎 林檎と 神棚の単調さ

明暗をうらのう如き竈の火

男げのないのがこわい母家建

客齋の家に残したつばめの巢

愚痴を聞くまも忙しい四本針

タイムイズマネー 鰯焼いてるまの読書

しようむない香具師を半日見てしまい

俄雨逃げ込む村は半里先

蟬ジャンジャン

梨が冷えてる井戸はそこ

負けたとて旦那に出さす馬券なる

パトロンへひけめ感じる兄を連れ

パトロンへ妹の靴もたのんどき

タイトルの消えるが如く子等に逢う

母は来ずたのんだ梅の壺も来ず

夜ふかしも朝寝も父にまけじとす

生活簡易化単細胞でありたき日

一日の惜しさピリオドうつて寝る

「君の名は」を見た話手は五十すぎ

母は毒婦 処女の櫻ン坊

ようように芽が生え出した二度の縁

御随意に座蒲團敷いて貰う客

恒例によつて裾匐う寄附の組

一泊と見えぬスキ一の荷ごしらえ

沿線を賑わす梅となりかける

本ものの元祖に迷う駄へ下り

園丁とおもてか猫がつきまとう

箸うごく通りに猫の首動き

お店繁昌忘れられてる猫の皿

ニューカーの目立つプラット水も撒き

改札を出るも先駆者たらんとす

三味線草線路の錆に倦きもせず

鬱憤は空へ消えるか卷たばこ

脱稿は近し煙草はもうしまい

どの袖のバットも空になつてゐる

自惚れなそれは金へのお世辞也

金の奴隷の奴隷となつて御寮人

貯金箱またひき潮となりはじめ

めかす気もなく一本の名古屋帯

信心の寺は晝寢によいところ

ありがたい雨なり稲の風も吹き

夕立が晴れてお寺の冷やつこ

お茶の日の菓子が重たい紹の袂

お茶おごる優越感の眼の碧き

懷が寒くなつての純喫茶

片意地な親子だまつて膳につき

親と子の野望は別な道を行く

あぶなげなお世辞

ピヨ　ピヨ　ひよこの毛

柄にないお世辞は的をはずしたり

検閲が来ているらしい市場の値

糸ごんにやく慄えはかりへ盛られたり

まけ方は二銭三銭丁稚らし

少女歌劇シルクハットへしなを見せ

彼女との落付く先は純喫茶

ハンドバック持たす異性と心得る

サービス百パーセントマツチ減る減る

ゼンマイのゆるむ女給は出る覚悟

マスターを非難仕合うて女給降り

あれも又数の中なるウエトレス

コツク場で女給の嘘を聞いている

マドロスの気で出張の夜を歩き

出張に邪魔な土産をことずかり

女將から鱧と呼ばれて気に入られ

忘れもの届いて吞んだ順が知れ

ラブレターの嘘に女神と書きにけり

心ブラを貸ある女將めざとく見

御堂筋スローモーションへつ込んだ

下戸の意地上戸の意地が辻でもめ

袖はねて紙幣きへいが出そうもないマント

梯子酒妻へはにぎり通しとき

男の世界覗く眼鏡はこちらです

あかしばなそのまま朝の酒となり

朝酒にほのぐ海が白らみたり

せいのない相槌ながら愚痴を聞く

交渉に邪魔な正直者を連れ

植木屋の隣りへ住んで少し植え

紫の粉が散れ

粉が散れ 揚雲雀

揚雲雀 わが魂を持つて行け

ちいちくちいちく

翼の下の花蕊

昔娘にてありける頃の腕時計

海鳴りを物凄く聞く父の留守

眠るよりほかに浄土の地をば見ず

How to love 図書館へ来て物足らず

雨 雨 雨 バーも淋しきアスファルト

君の青私の青と違うなり

ものぐさは猫におとらず火を囲む

紙一重そんなセンスは邪魔くさし

夢に見た寒さとなつて御陵暮れ

そも何のうれいぞ海の鉛色

晝の風呂いつそあひるで居りましよか

まああんな瘦ぎしもいる土俵入

極大で握る火事場の握りめし

返杯の猪口寄せ鍋の湯気を越え

牡丹雪櫓太鼓が鳴りそうな

インキの赤さ

ポートワインに見えて来る寒さ

屋根看板の裏に坐つて初夏の風

すだれ巻き揚げても暑い大阪市

二階から見れば色街めく射的

思案して通る畑は露にぬれ

大都市に近く案山子もジャケツ着る

大根畑へ紋白蝶が降つて来た

高架線あゝ料亭の庭せまし

ただ貰うような紋日の鰻めし

不景気にかかる人出を憤り

水族館の序幕錦魚を泳がせる

ガラスまで来てバツクする櫻鯛

縞鯛はキング真鯛はクキンにて

孟蘭盆の風にながれて来た蜻蛉

こおろぎよ私も蚊帳で起きている

行末はハムとなる声のどかにて

なめくじも猫も息するおそろしさ

悠々と泡は目高をやりすごし

蠅叩き蠅は天井へそれたまま

子を連れて出たは去年の墓蛙

産むだけは産んで果かなくなりし蛾よ

娘まだ帶へ縫込む智慧も出ず

泣顔をかくし水屋の前へ立ち

罰あたり奴と冷飯を食べさせ

未亡人その冗談へむきになり

夫人夫人と云われ個性のないくらし

女さまざま猫の頭を皆持てり

ノールスと知られて肩の荷をおろし

花粉に酔えり浅はかなることよ

今日の私の心に嵐立ちそびれ

無言の祈り十字架のいや高し

魂の創世記はこれからですの

山を移す信仰に生きんかな

サンデー晴

五女はバイブル持つて出る

腕時計忘れ出る程あわただし

虫を殺してる人ばかりだろか

吊革を持つ

風に靡く柳ではござんせぬ

雲ばかり見てる私のルンペン根性

此癖を捨てたら形見何もなし

曲げぬころが私のまこと

あなたへのプレゼント

空見れば空に葉刈の音がして

別館を建て増しつつじ真盛り

仏壇の埃を意見して帰り

糠味噌をあびてこおろぎ桶を出す

産めよ殖えよ

地に充てよと囀るよ

籠の鳥諦めたのか

空を見ず

挿入のキチエン私見も少し入れ

ワンステツプのテンポで茶碗洗うかな

櫻漬山々霞むかと覚え

夕焼を残して雀寝しずまり

洋館はいばらの垣へ遠く建ち

時雨れたら松の木もある庭雀

峰の雪旅立つ心そぞろなり

グラビヤでスキーの姿見たばかり

時雨れけり雀の宿へあられ落ち

子を捕られた雀

けろりと樋こひから出

群雀なかの一羽がタクト振る

防犯係女將に言質とられたり

午前九時出頭すれば刑事居ず

やがてトンネル

百姓が小さく見え

案山子かと思れば煙草を喫い出した

ほほじろの声を忘れた河の巾

タイ凝りの借れるバーとてなかりけり

誘惑の灯をタクシーで見て通り

花の寺酔えば祈願の身も忘れ

合シヨールさえも重たい花疲れ

郊外電車の灯にもほのめく夜の街

買いたてのソフトサロンへ立ち寄る気

宙を浮く思いフエルトで逢いに行き

十合 大丸 帶一本にくたびれる

陳列のかげに隠れた宣傳部

デパートを出たら灯もつき雨も降り

ニ
ユ
ー
ル
ツ
ク
あ
れ
が
長
屋
を
出
た
姿

貝
細
工
其
日
暮
し
の
手
に
ぬ
ら
れ

雛の画に題して

ひな壇の蛤沖が恋しかろ

明けきらぬ部屋に真白き雛の顔

五人ばやし富樫に似てるのも交じり

月見草 一番星が出はじめた

蓼そえて一層涼しい鮎の皿

あすはもう皆死んでゐる螢籠

地下鉄へ出よとしたのに地下賣場

ジャー失敬という眼吊革持つ少女

さくらん坊頸の細さに似る乙女

同盟旗きのうの敵もひるがえる

水と油何を好んで和睦せん

告知板となりの文字があつかまし

団体旗待合室も探させる

待合室トランク見張る下女を連れ

本賣つた事も苦学の中へ入れ

古本屋自論を吐いて賣りつける

読むだけの客と見ぬいた古本屋

古本屋不承不精に値を申し

では皆様おやすみJ O B K しんとなり

タイピストへ割勘とらぬ菓子が来る

初午に社員総出と云う会社

タイピストに批判されてる平社員

貸浴衣着るがはやいか肩をぬぎ

ホテルから明日はもう立つ港の灯

七光りだと婦人記者思えども

とつときの文句でほめる婦人記者

いけすかない仲居も生きる姿にて

煙みななびいて都市を威圧する

廣告燈よぼよぼよぼと文字歩く

生鯛の皿松もぬれ慰斗もぬれ

出刃庖丁鯛に触れたは一年目

海老ぱちりぱちり跳ね出た漆喰場

賣れ残りらしい小鯛をまだまけず

蝙蝠が出るとままごと怖気づき

雲の峯蟹をみつけた児の真上

鬼灯と見しは束の間の錦魚

錦魚二匹あと追うて行く姿也

風鈴の正体ガラスとは淋し

すべり台ママは上まで運ぶ役

蛇惡魔出そうに柘榴熟しきる

曼珠沙華子の命日に毒々し

こおろぎよ今年は一人たらぬ蚊帳

藻の花はあまき二人の頃のまま

腰掛は瀬戸か伊萬里か藤の下

消える虹なれば尊く美しく

船旅の嵐も海の魅力にて

ドラが鳴るテープも風に鳴る別れ

窓掛へ崖が迫つて来るホテル

月おぼろ君の情に似ておぼろ

懷も知らず惡友肩を打ち

惡友へ妻は妥協のかげもなし

おごらねばならぬ封書をとりつがれ

岸の里の新居にて

窓を開けても六甲は見えず

山を見ずこのヒヤシンスあれば足る

窓近く雀が鳴くも故郷にの朝

本堂の廊下素足となる埃

鬼あざみ無縁の墓を淋しうす

嘘嘘嘘 木魚の音もそうひびく

風鈴屋汗かく荷とは思われず

貸浴衣足四五寸も出る息子

パラソルをたたんで歩く藪の風

晩酌の膝を飼猫見逃さず

気をきかしすぎてお銚子もちになり

約束をあぶながられる程に呑み

谷川のひととこぬしの棲む青さ

谷川の音が床下くぐる宿

叱られもせず迷猫納屋で産み

おつと逃すまいと魚屋声をかけ

蠟燭の芯卷きまいてもまいても

陽が落ちぬ

悪人へ陽は燦々と惜しみなく

苦学 苦学と樂らくそうに云う家出

法科出も何の要なき部屋住い

部屋住みの書齋テレビも備えつけ

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

貧しき家に天壽全うする草よ

野の百合を見よと予算のないくらし

種子蒔いてゐるなと屋根の雀ども

土を着た種子は一躍して出る気

屋根上へほりあげられたゼラニウム

白粉のいのち忘れたチタニウム

小町草袂の柄をぬけて来て

さらばくと散るはずかけ

背廣服 金は裸で鳴つて居る

うどん屋の酒は足から醒めそうな

街道でとつぷり暮れる作業服

よう／＼に松の梢へさわる月

鶴の間の几帳のかげはなおくらく

寝る前の煙草は何を思えとか

ベルよほど癪にさわつた響きよう

罌粟坊主使命を果しおとろえぬ

ぼろついて来たが因果な傘を借り

御苦労さんと云いたい雨の田植見る

妹の方が手なれたきうりもみ

鮎美さんの結婚を祝して

脊の君となつて有馬の霧に立ち

金は及ばぬ山の靈気や

囀りが籠にこぼるゝばかりなり

ある日店でとてもおしやれな
仙人掌を見た

蜃気楼と思え財布も人も樹も

ウキンドへみとれる妻をほつて行き

スフにしてあとは梯子で消える金

番附を見なおす今の愁歎場

もつれし糸へ鋏を入れず

スリーカツプス オフ ワイン

悩みことなるくちにふれ

電線から落ちる雫もあとやさき

世は進化せりああ傀儡となりし我等

子等は星　月は冷えゆくものと知れ

ひき潮のように山から晴れて来る

振向けば君も小さい並木路

なつかしの故郷を翼の下に見て

ポプラの葉風に一撥を起すよう

ひだまりの屑屋に夢のある仕分け

小金あり梅干す事で夫婦もめ

鬼薊蝶々に痛いところだらけ

浜ひるがお蝶々は低う低うとび

菜の花はあの屋根のはて屋根のはて

吸物に木の芽のそわる暖かさ

菜種は黄色れんげは赤に咲くものよ

菜の花も霞むか処女の頃の恋

後樂園にて

この辺に野だての釜の欲しい芝

起重機のバツクの海も暮れかかる

握飯二重に積んで子を連れる

採集ミる可からずの札胴乱を提げて読み

噴水のしぶきが届くハムサラダ

ままごとに桑の実も摘む信濃路や

鉄瓶をおろして雨の音と知る

吾は海の子泥を立て泥を立て

望遠鏡次はやぶれた帆が入り

奪い合うていつち下手なが炭をつぎ

爛瓶を射通す櫓の火を見つめ

よい星の下に生れて無策で居

委任状かき淋しくなれり

ルビーサファイヤ

花のしめりに及ぶべき

其姿 虹も立つならめかしましよ

鎧戸は開かず朝霧せまる家

たまさかの朝寝を病気かと問われ

極道の田タク朝の霧を行く

薄情な男となつて鹿島立ち

中山の人出へ匂うこぼれ梅

中山へ帶も返さぬ倦怠期

因襲脱し難きビルの鳥居よ

煙突が骨佛にも見ゆる晝

袖張つて海が見えたか奴いか

風落ちて驚く沼の曼珠沙華

脊に腹はかえられず此処も屋根を葺く

すき髪の新チユリズムを讃美せん

共白髪生えねばすまぬかの如く

お彼岸の亀にも無沙汰してる也

一心寺の墓に隠れて帰る也

無念無想どころかせわし一心寺

草に寝て今日もあしたも人間ざらい

睡蓮も咲き証文も要る世也

乞食でも先祖は倉もありつらん

朝の蚊帳流れ出すかと思われる

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

グライダー見学

蜻蛉までみがるな盾津草の上

水見舞水一升のありがたさ

病人のねがい天井へ夜具を吊り

心棒のゆるむ音して荷を運ぶ

洋館へタワーの欲しいよい月夜

セレナーデ百合の匂いに包まれて

バイくと手を振る模倣人種の子

もう秋の雲が出だしたなんばきび

茅屋をお静かですと賞められた

近鉄沿線国府にて

葡萄棚雨もみどりに降る国府

いが栗も少うしそえた茸の籠

夜深し虫のアレグロモデラート

チ、チ、チ、チ、殺す場面となる虫か

すず虫はこれか淋しや晝の籠

風さつとすすきの虫をだまらせた

虫しげきまま朝となる物案じ

露を呑でいたし松虫の様に

俄雨木の下蔭もぬれて来た

もう先は半みちと云う藁屋へ来

注射マニアの奥様に日の永き

客にあわすレベルピアノのキーのごと

おとろえぬ父なればこそかかる意地

春霞案内事務所誰もいず

他国まで続く菜種の畑と見え

信ずれば彌陀の光の水の色

金箔の眩惑も見ゆ南無阿彌陀

女の子揃えの柄が気に入らず

相傘で長女の伸びたことを知り

おぼつちやんだわと見合をした所感

良縁をことわる訳を知る妹

姉の眼の嫉妬に妹ひかえ勝ち

どうぞ誤診であつて欲しいと母の慾

蝙蝠傘修繕にある日ぼられたり

ほそぐと湯屋の煙のひるひなか

達筆かしらが虫のくうた軸

投賣りへうたがい深い女の眼

金貸してよその世帯へ口を入れ

言訳をして癰癰を破裂させ

嬉しさの女は眉を少しあげ

叩かれて背廣つまずきそうに行き

團服の手前マルタマ素通りし

モーニングピアノへ立つていと細し

やさ型もカールも芦屋夫人めく

女の友情永い永い手紙書き

ああ 金がでつちあげたる声かそも

老眼をかけて文句のてきびしさ

事務多忙一輪挿しも邪魔がられ

督促のペンと思えば指痛く

カレンダの釘うつ暇もなく暮れる

歩と角と飛車と桂馬の子をば持ち

飛行機は流れる 背なの子は達者

カロリーを無視して鉢に皿に凝り

臍くりの傳授に永居して帰り

サラリーマンの奥さまらしく包ませる

猫の子 人の子 ウジャ／＼

ラジオやかましい

かこちつゝなげきつゝ喫う巻たばこ

友情の嘘へ夫人は腹を立て

豆腐屋は虹の出ているのも知らず

ふところにあるやさしさの陽にうたれ

子沢山灯ともし頃を湯から出る

色白に生れて双児よく目立ち

お美事といわれ苦しい酒を呑み

インテリの無口がたたる疎開先

がらあきの電車にころやすらけし

発心の櫻淋しい色となり

水仙白くわれをいましむ

お達者なことよ蘇鉄がよみがえり

一心寺にて

骨佛みな成佛をした人か

傳令鳩まだ還り来ぬ時化となり

眠むかつた事を忘れぬ帰還兵

カルピスは乳色浜はテント張

うたた寝となる御佛の眼の長さ

人生を霞と見てゐる親がかり

のろけ函ライバルが居て殺氣立ち

行状記へ処女の論旨のすさまじく

父と母同じはちすを疑わず

今ぞ知るかたくなな父慈悲の父

死出の旅にも日本酒位あるかしら

交々に孫がしかえる巻線香

亡き父を思う

父はあらず壁ばかりなる父の部屋

夢に來た父はゆもじの夏姿

花替えること氣安めの佛の日

蜘蛛殺す役目の父の無き秋ぞ

長男 ロンドンを喪いて

弟へ残す形見のかたボール

ロンドンの一周忌

まぼろしであつたか死んだ児の裸

一周忌かしこもこも草萌ゆる

一周忌こんな蒲團で寝ていたか

紺紵 今はアートのために裁つ

香を焚いてまぎるゝ事も凡夫なる

欣女さんを悼む

御再臨の日には耀く君なるよ

小林澄舎氏を悼む

冥府まで届くテープのあらばこそ

母堂を亡くされた鋭々氏へ

あの雲のかげに声する一七日

艸藥氏を憶う

おとぎり草の悲話をかたみとして逝きぬ

母君を喪い給える生々庵氏に

ただ彌陀にすがれと珠数を残されし

ハワイ戦場となる

同胞を偲ぶも今は地図の上

落下傘敵に見られなさとられな

頑丈に生れ一兵卒となり

南進日本さても墳墓の地の多き

七道で軍需景気の一人降り

絢爛の花屋見かえる人もなし

ガス出てる間にと要らない物もたき

着替さえ今は要らぬと思う世ぞ

統制々々だまつて日向見ていたり

部屋住みへまだ統制の波が来ず

煙立ち立つ難波の街であつた筈

馬車馬のめかくし欲しい物価高

消費者のどつち向いても痛められ

点数のかさむ安物ばかり買う

第一便二便もバナナ食うたより

猫 今日もお粥のしずくだけ貰い

飼猫の盜癖ゆるす気にもなり

漏るところもあるが屋根ある有難さ

なつかしの酒よベンチへ名を残し

かまへ焚く枝は梅栗柿櫛

増産の手は境内へまでも伸び

雑魚値切る峠を越えて来た人の

なにがしの池のたにしを捕りこにし

第二疎開地 伊賀 上野市

開墾の畠は一里さきの山

盗み手はないが烏が食う畑

上野秋祭に

何俵とかえたか帯の錦通し

柴賣へ今日も時雨れる伊賀上野

崖上の窓へ自轉車から話し

やゝあつて雷峰を替えて鳴り

終戦後の大阪にて

焼跡は豊作茄子も花ざかり

引揚者灰皿を借り瓶を借り

ニユー・ルック着せる農家の夢は消え

疎開地へ浅黄の空を置いて来た

眼覚めても雀の鳴かぬ窓に居る

山恋しなどと余裕のある身かや

○
知らぬ間に鹿に巻かれた立話

ロマンスも霞む猿沢池の水

鹿もまだ知らぬ小雨が降り出した

八重櫻車に乗つたまま眺め

夕立にぬれぬ燈籠もある春日

小鳥だつたら私も来てる奈良の奥

牡鹿より脊が低くかつたお母さん

新薬師寺

一九四

十二神將チヨンと木頭ひびきそう

八重櫻咲くのを待たず奈良を立ち

朝立ちの膳奈良漬の音をさせ

八

割勘で鹿寄せを見ることが決め

ほろ酔いが一ト口かじる糠せんべ

角伐りは夕日をうけてくたびれる

奥山で鹿苑知らぬ鹿と逢い

今鳴いた鳥はどの枝依水園

依水園俯瞰図の中歩くよう

十八間戸素性あかさぬ人も居る

十八間戸ヨルダン川はないけれど

粕桶へかつばと伏した瓜と瓜

奈良人形糊ききすぎた袖を張り

奈良人形刀の狂いへ彩をつけ

値を聞いて見なおす奈良の紅花墨

夕靄に仮駕二挺三輪へつき

新ノ口はあそこと宿の窓を開け

多武峯

拝殿も櫻も燃える中へ来て

見下せば大和三山跨げそう

のろい釘とどかぬ杉の太さにて

石段の下で見た塔又見上げ

飛鳥川かわる淵瀬を知らぬ蘇我

桑原と云いく渡る飛鳥川

聞いて来た滝は身のたけほどにして

墓に水かけに

海越え山を越え

あとがき

私の句が個人句集として刊行されようとは夢にも思っていなかった。不朽洞会員の句集が上梓される時には少しばかりお仲間入りをさせて頂くつもりであつたが、不朽洞会の前理事長中島生々庵博士の発案で私の句集を別に出すことに常任理事会で決議された。此案は生々庵博士の義理堅いお考えからであらうと推察しているが、現理事長の北川春巢博士がその意を継承され刊行委員長としていよく上梓の運びとなつた。なるべく肩の凝ることは遠慮したいと云う私の我儘を今、ごりがんに通しては却つて常任理事の方々へも度々御迷惑をかけることでもあり、また姉嬢を早くかたづけねば妹嬢が縁づかれぬと云う世のならいもあるので、私はおとなしく皆さんの御好意をおうけすることにした。編纂については、年代順に句を拾うことも一応考えられたが、私は明治四十

四年頃から作句をはじめているので、そんな古い時代の句を蒐集することも、整理することも容易でないので、「川柳雜誌」の創刊時代（大正十三年）から今日までの句の中で順序もなく拾うこととした。その点、この句集はごった煮の感があると思われるが、たとえ一作品でも二作品でも、皆さんの味覚に訴えることが出来れば、それで沢山だと思っている。そして仮名遣いは読み易いだろうと思つて最近の仮名遣いに改め、字訥も二三訂正した。なお巻頭に掲げた写真「路郎句集」の旅人の出版記念祝賀会の時のものと、阪神時代のもので、特に句集のための撮影はしなかった。終りに拙句の蒐集については八木摩太郎氏に格別の御助力を願つたので茲に深甚の謝意を表する。

一九五五年初夏

藤乃句集「福壽草」索引

五十音順

ああ金が……………	(一六三)	飛鳥山……………	(一九九)	生鯛の……………	(一〇五)
相傘で……………	(一五七)	あすはもう……………	(九五)	池に鶴……………	(一五)
合ショール……………	(九〇)	姉の眼の……………	(一五八)	石段の……………	(一九九)
あかしばな……………	(五八)	あの雲の……………	(一七九)	依水園……………	(一九六)
秋ざくら……………	(九)	あぶなげな……………	(五〇)	苺は……………	(三九)
悪人へ……………	(一一七)	雨雨雨……………	(六二)	一日の……………	(三八)
悪友へ……………	(一一一)	ありがたい……………	(四七)	一心寺の……………	(一四五)
明けがたの……………	(二九)	ある日店で……………	(一二七)	一周忌こんな……………	(一七七)
明けきらぬ……………	(九四)	あれもまた……………	(五四)	一周忌かしこも……………	(一七七)
揚花火……………	(一〇)	云いまけて……………	(一一)	一生に……………	(一八)
揚雲雀……………	(六〇)	言訳を……………	(一六〇)	一泊と……………	(四〇)
朝酒に……………	(五八)	いが栗も……………	(一五一)	糸ごんにやく……………	(五一)
朝立ちの……………	(一九四)	生きること……………	(一九)	委任状……………	(一三九)
朝の蚊帳……………	(一四七)	いけすかない……………	(一〇三)	今ぞ知る……………	(一七五)
				今鳴いた……………	(一九六)
				妹の方が……………	(一二五)

インキの赤さ……	(六六)	産めよ殖えよ……	(八三)	おごらねば……	(一一一)
印刷屋……	(八)	孟蘭盆の……	(七一)	牡鹿より……	(一九三)
因襲脱し……	(一四二)	瓜もみが……	(二二)	白粉の……	(一二一)
インテリの……	(一七〇)	うるさ型……	(三〇)	お達者な……	(一七二)
色白に……	(一六九)	嬉しさの……	(一六一)	お茶おごる……	(四八)
植木屋の……	(五九)	売れ残り……	(二〇五)	お茶の日の……	(四八)
嘘嘘嘘……	(一一三)	ウキンドへ……	(一二八)	おっと迷すまい……	(一一六)
うたた寐と……	(一七三)	海老ばちり……	(二〇五)	男げの……	(三三)
内なりと……	(二〇)	沿縁を……	(四一)	弟へ……	(一七七)
鬱憤は……	(四四)	園丁と……	(四二)	おとぎり草の……	(一八〇)
腕時計……	(七五)	煙突が……	(一四三)	おとろえぬ……	(一五五)
うどん屋の……	(一二二)	鉛筆の……	(二七)	男の世界……	(五八)
自惚れな……	(四五)	お歸りに……	(一二)	鬼薊蝶々に……	(一三三)
奪い合うて……	(一三八)	女将から……	(五五)	鬼あざみ無縁の……	(一一三)
海鳴りを……	(六一)	奥さまは……	(二八)	お彼岸の……	(一四五)
産むだけは……	(七三)	奥山で……	(一九五)	おぼっちゃん……	(一五七)

牡鶏が……………	(九)	かこちつゝ……………	(一六七)	彼女との……………	(五二)
女さまさま……………	(七六)	籠の鳥……………	(八三)	花粉に……………	(七七)
女の子……………	(一五七)	かざ雲が……………	(二六)	かまへ焚く……………	(一八七)
女の友情……………	(一六二)	貸浴衣着る……………	(一〇二)	紙一重……………	(六三)
お美事と……………	(一七〇)	貸浴衣足……………	(一一四)	癩癩が……………	(一三)
お店繁昌……………	(四二)	粕桶へ……………	(一九七)	燗瓶を……………	(一三八)
おもわくの……………	(三二)	数の子の……………	(三)	カルピスは……………	(一七三)
親と子の……………	(四九)	風さつと……………	(一五三)	カレンダの……………	(一六四)
開墾の……………	(一八八)	風に靡く……………	(七九)	カロリーを……………	(一六六)
貝細工……………	(九三)	片意地な……………	(四九)	崖上の……………	(一八九)
改札を……………	(四三)	片便り……………	(二一)	頭丈に……………	(一八二)
買いたての……………	(九一)	門松は……………	(七)	ガラスまで……………	(七〇)
街道で……………	(一二二)	金貸して……………	(一六〇)	ガス出てる……………	(一八三)
銅猫の……………	(一八六)	鐘がひびかぬ……………	(一七)	墓口も……………	(一八)
回覧板へ……………	(三〇)	金の奴隷……………	(四五)	がらあきの……………	(一七〇)
案山子かと……………	(八九)	金は及ばぬ……………	(一二六)	柄にない……………	(五〇)

聞いて来た……	(二〇〇)	苦学苦学と……	(一一八)	郊外電車の……	(一九一)
消える虹……	(一〇九)	釘づけに……	(四)	高架線……	(六九)
簪替さえ……	(一八三)	草に寐て……	(一四六)	広告燈……	(一〇四)
起重機の……	(一三五)	蜘蛛殺す……	(一七六)	交渉に……	(五九)
記念品……	(八)	雲の峯……	(一〇六)	蝙蝠が……	(一〇六)
君の青……	(六三)	雲ばかり……	(八〇)	蝙蝠傘……	(一五九)
「君の名は」……	(三九)	訓導の……	(三)	恒例に……	(四〇)
錦魚草……	(二五)	桑原と……	(一九九)	こおろぎよ今年……	(一〇八)
錦魚二匹……	(一〇七)	愚痴を聞く……	(三四)	こおろぎよ……	(七一)
金箔の……	(一五六)	グラビヤで……	(八六)	子が出来て……	(二九)
客にあわす……	(一五五)	罌粟坊主……	(一二四)	小金あり……	(一三二)
今日の私の……	(七七)	検閲が……	(五一)	告知板……	(九八)
気を変えて……	(一四)	絢爛の……	(一八三)	腰掛は……	(一〇九)
気をきかし……	(一一五)	煙立ち……	(一八四)	乞食でも……	(一四六)
銀狐……	(三)	煙みな……	(一〇四)	コスモスに……	(九)
行状記へ……	(一七四)	下戸の意地……	(五六)	子沢山……	(一六九)

コック場で……………	(五四)	極大で……………	(六五)	サラリーマンの……………	(一六六)
骨仏……………	(一二二)	御再臨の……………	(一七九)	雑魚値切る……………	(一八七)
小鳥だったら……………	(一九三)	御随意に……………	(四〇)	思案して……………	(六八)
此癖を……………	(八〇)	午前九時……………	(八八)	鹿もまだ……………	(一九二)
この辺に……………	(一三五)	五人ばやし……………	(九四)	叱られも……………	(一一六)
小町草……………	(一二一)	ごもくあさが……………	(三一)	時雨れけり……………	(八七)
紺紺……………	(一七八)	サービス……………	(五三)	時雨れたら……………	(八五)
交々に……………	(一七五)	囀りが……………	(一二七)	七道で……………	(一八二)
子等は星……………	(一三〇)	桜漬……………	(八四)	死出の旅にも……………	(一七五)
子を置いて……………	(二七)	さくらん坊……………	(九六)	柴売へ……………	(一八八)
香を焚いて……………	(一七八)	尺あてて……………	(一一)	縞鯛は……………	(七〇)
子を連れて……………	(七三)	指図する……………	(二八)	しみんと……………	(一八)
子を捕られた……………	(八七)	三ヶ日……………	(六)	蟹気楼と……………	(一二七)
児を寐かして……………	(二三)	サンデー晴……………	(七八)	信心の茶店……………	(一六)
極道の……………	(一四一)	散髪屋……………	(八)	信心の寺は……………	(四七)
御苦労さん……………	(一二五)	さらばさらば……………	(一二一)	信ずれば……………	(一五六)

心ブラを……………	(五六)	十八間戸素性……………	(一九六)	せいのない……………	(五九)
心棒の……………	(一四八)	水仙白く……………	(二七一)	節約の……………	(五)
三味線草……………	(四三)	水族館の……………	(七〇)	脊に腹は……………	(一四四)
出張に……………	(五四)	睡眠剤に……………	(一九)	脊の君と……………	(一二六)
少女歌劇……………	(五二)	吸物に……………	(一三四)	背広服……………	(一二二)
松竹梅……………	(四)	睡蓮も……………	(一四六)	蟬ジャンジャン……………	(三五)
消費者の……………	(一八五)	すき髪の……………	(一四四)	セレナーデ……………	(一四九)
しよむない……………	(三四)	すず虫は……………	(一五二)	ゼンマイの……………	(五三)
知らぬ間に……………	(一九二)	雀来よ……………	(一四)	相談を……………	(一三)
人生を……………	(一七四)	すだれ巻き……………	(六七)	挿入の……………	(八四)
事務多忙……………	(一六四)	スフにして……………	(一二八)	疎開地へ……………	(一九一)
ジャ―失敬……………	(九六)	すべり台……………	(一〇八)	十合大丸……………	(九二)
十三荷……………	(一一)	住吉の……………	(一五)	袖張って……………	(一四三)
十七字……………	(二)	スキートピーの……………	(二八)	袖はねて……………	(五七)
十二神将……………	(一九四)	スリーカップス……………	(一二九)	其姿……………	(一四〇)
十八間戸……………	(一九六)	生活……………	(三八)	そも何の……………	(六四)

空見れば……………	(八一)	谷川の音……………	(一一六)	陳列の……………	(九二)
剃りに来て……………	(八)	谷川のひととこ……………	(一一六)	注射マニアの……………	(一五五)
増産の……………	(一八七)	種子蒔いて……………	(一二〇)	宙を浮く……………	(九一)
タイ凝りの……………	(九〇)	たまさかの……………	(一四一)	貯金箱……………	(四六)
タイトルの……………	(三七)	魂の……………	(七八)	長女だけ……………	(二七)
タイピストに……………	(一〇一)	第一便……………	(一八五)	ちょぼちょぼ……………	(一〇)
タイピストへ……………	(一〇一)	大根畑へ……………	(六八)	月おぼろ……………	(一一〇)
タイムイズ……………	(三四)	大都市に……………	(六八)	月見草……………	(九五)
嵐落ちて……………	(一四三)	脱稿は……………	(四四)	土を着た……………	(一二〇)
他国まで……………	(一五六)	団体旗……………	(九八)	角伐りは……………	(一九五)
叩かれて……………	(一六一)	団服の……………	(一六一)	露を呑んで……………	(一五三)
ただ彌陀に……………	(一八〇)	ちいちく……………	(六〇)	鶴の間の……………	(一二三)
ただ貰う……………	(六九)	地下鉄へ……………	(九六)	鉄瓶を……………	(一三七)
達筆か……………	(一五九)	チ、チ、チ、チ……………	(一五二)	点数の……………	(一八五)
蓼そえて……………	(九五)	父と母……………	(一七五)	手をのべた……………	(二一)
七夕に……………	(一七)	父はあらず……………	(一七六)	出語りが……………	(二四)

では皆様……………	(二〇〇)	どの袖の……………	(四四)	奈良人形刀の……………	(一九七)
出刃庖丁……………	(二〇五)	ドラが鳴る……………	(一一〇)	奈良人形糊……………	(一九七)
デパートを……………	(九二)	中山の……………	(一四二)	二階から……………	(六七)
電線から……………	(二二九)	中山へ……………	(一四二)	握飯……………	(一三六)
伝令鳩……………	(二七二)	泣顔を……………	(七四)	二代目の……………	(三二)
統制々々……………	(一八四)	投売りへ……………	(一六〇)	新ノ口は……………	(一九八)
豆腐屋は……………	(一六八)	菜種は……………	(一三四)	ニューカーの……………	(四二)
督促の……………	(一六四)	なつかしの故郷……………	(一三一)	ニールック……………	(九三)
とつときの……………	(一〇三)	なつかしの酒……………	(一八六)	ニールック着せる……………	(二七)
屠蘇機嫌……………	(六)	七光り……………	(一〇三)	俄雨木の下……………	(一五四)
蜻蛉まで……………	(一四八)	なにがしの……………	(一八七)	俄雨……………	(三五)
共白髪……………	(一四四)	菜の花は……………	(一三四)	盗み手は……………	(一八八)
採集る可からず……………	(一三六)	菜の花も……………	(一三四)	糠味噌を……………	(八二)
どうぞ誤診で……………	(一五八)	南進日本……………	(一八二)	葱畑……………	(二〇)
同胞を……………	(一八一)	何俵と……………	(一八八)	猫今日も……………	(一八六)
同盟旗……………	(九七)	なめくじも……………	(七二)	猫の子……………	(一六七)

眠むかった……	(一七三)	箸うごく……	(四二)	罰あたり……	(七四)
ねんねこと……	(二三)	梯子酒……	(五七)	晩酌の……	(一一五)
寝る前の……	(一二四)	初午に……	(一〇一)	番附を……	(一二八)
眠るより……	(六一)	初蚊帳の……	(一四七)	パトロンへひけめ……	(三六)
値を聞いて……	(一九七)	初日キラ／＼……	(三)	パトロンへ妹……	(三六)
ノールスと……	(七六)	初風呂へ……	(七)	バラソルを……	(一一四)
野の百合を……	(一一九)	花替える……	(一七六)	引揚者……	(一九〇)
飲んでほし……	(一二)	花の寺……	(九〇)	ひき潮の……	(一三一)
飲むほどに……	(六)	花の留守……	(二四)	飛行機は……	(一六五)
のろい釘……	(一九九)	母は来ず……	(三七)	ひだまりの……	(一三二)
のろけ函……	(一七四)	ハンドバック……	(五二)	ひな壇の……	(九四)
蠅叩き……	(七三)	浜ひるがお……	(一三三)	百姓の……	(三一)
拝殿も……	(一九八)	早咲きの……	(二一)	ヒヤシンスの……	(一一九)
How to Love	(六二)	春霞……	(一五六)	屋の風呂……	(六四)
墓に水かけに……	(二〇〇)	パイ／＼と……	(一四九)	病人の……	(一四八)
薄情な……	(一四一)	馬車馬の……	(一八五)	風鈴の……	(一〇七)

風鈴屋……………	(一一四)	へちまへちま……………	(一二二)	ほそぐと……………	(一五九)
福寿草……………	(四)	糸瓜もう……………	(一二二)	帆立貝……………	(二三)
不景気に……………	(六九)	蛇悪魔……………	(一〇八)	癡心の……………	(一七一)
夫人夫人……………	(七五)	返信で……………	(五)	ホテルから……………	(一〇二)
歩と角と……………	(一六五)	返杯の……………	(六五)	本売った……………	(九九)
懷が……………	(四八)	部屋住みの……………	(一一八)	本堂の……………	(一一三)
ふところに……………	(一六九)	部屋住みへ……………	(一八四)	本ものの……………	(四一)
懷も……………	(一一一)	「HEALTH」見……………	(一九)	ほろ酔いが……………	(一九五)
船旅の……………	(一一〇)	別館を……………	(八一)	望遠鏡……………	(一三八)
噴水の……………	(一三六)	別府染……………	(一七)	茅屋を……………	(一五〇)
振向けば……………	(一三一)	ベルよほど……………	(一二四)	防犯係……………	(八八)
古本屋自論を……………	(九九)	放課後は……………	(一三)	牡丹雪……………	(六六)
古本屋不承……………	(九九)	法科出も……………	(一一八)	ぼろついて……………	(一二五)
仏壇の……………	(八二)	はおじろの……………	(八九)	ボブラの葉……………	(一三二)
葡萄棚……………	(一五一)	鳳仙花……………	(二五)	まああんな……………	(六五)
臍くりの……………	(一六六)	鬼灯と……………	(一〇七)	幕の内……………	(一六)

まけ方は……	(五一)	水と油……	(九七)	眼覚めても……	(一九一)
負けたとて……	(三六)	水見舞……	(一四八)	もう秋の……	(一五〇)
曲げぬ心……	(八〇)	御堂筋……	(五六)	もう駄が……	(一六)
貧しき家に……	(一一九)	峰の雪……	(八六)	もう先は……	(一五五)
マスターを……	(五三)	未亡人……	(七五)	モーニング……	(一六二)
待合室……	(九八)	昔娘にて……	(六一)	木像に……	(二九)
松の内ダーク……	(三)	無言の祈り……	(七八)	もつれし糸へ……	(一二九)
松の内まだ……	(五)	虫しげき……	(一五三)	ものぐさは……	(六三)
窓掛へ……	(一一〇)	虫を殺し……	(七九)	薬の花は……	(一〇九)
窓近く……	(一二二)	娘まだ……	(七四)	木綿着の……	(二六)
窓を……	(一二二)	無念無想……	(一四五)	漏るところも……	(一八六)
まぼろし……	(一七七)	紫の……	(六〇)	八重桜車に……	(一九三)
ままごとに……	(一三七)	群雀……	(八七)	八重桜咲く……	(一九四)
曼珠沙華……	(一〇八)	明暗を……	(三三)	やがてトンネル……	(八九)
マドロスの……	(五四)	冥府まで……	(一七九)	約束を……	(一一五)
見下せば……	(一九八)	めかす気も……	(四六)	焼跡は……	(一九〇)

やさ型も……………	(一六二)	行末は……………	(七二)	林檎林檎……………	(三二)
屋根上へ……………	(一二〇)	夢に來た……………	(一七六)	吝嗇の……………	(三三)
屋根看板の……………	(六七)	夢に見た……………	(六四)	良縁を……………	(一五八)
山恋し……………	(一九一)	よい星の……………	(一三九)	ルビーサファイヤ……………	(一四〇)
山を移す……………	(七八)	洋館は……………	(八五)	老眼を……………	(一六三)
山を見ず……………	(一二二)	洋館へ……………	(一四九)	蠟燭の……………	(一一七)
やゝあつて……………	(一八九)	よう／＼に松の……………	(一二三)	ロマンスも……………	(一九二)
夕桜……………	(二四)	ようように……………	(三九)	若く云えば……………	(三一)
友情の嘘へ……………	(一六八)	浴槽へ……………	(二六)	忘れもの……………	(五五)
夕立が……………	(四七)	世は進化せり……………	(一三〇)	ワンステップの……………	(八四)
夕立に……………	(一九三)	夜ふかしも……………	(三七)	割勘で……………	(一九五)
夕立は……………	(一二)	読むだけの……………	(九九)	吾は海の子……………	(一三八)
夕譏に……………	(一九八)	夜深し……………	(一五二)	われ充てり……………	(二〇)
夕焼を……………	(八五)	鎧戸は……………	(一四一)		
悠々と……………	(七二)	ラブレターの……………	(五五)		
誘惑の……………	(九〇)	落下傘……………	(一八二)		

麻生葭乃川柳句集

福壽草

昭和三十年五月二十四日印刷
昭和三十年七月一日発行

定価二百五十円

著者 麻生葭乃の

著者略歴

明治二十六年二月二十四日堺に生まる、舊姓河盛、川柳に手を染めたのは明治四十四年頃、大正三年四月麻生路郎に嫁し四男五女の母

発行者

葭乃句集刊行会

委員長 北川春巢

発行所

川柳雜誌社

大阪市住吉區新代西五の二五

電話住吉 六〇八一番
振替大阪 七五〇五〇番

麻生路郎・主宰

— 創刊大正十三年 —

川柳雜誌

誌代一部四〇円送料四円
半ヶ年二六四円（〒共）
一ヶ年五二八円（〒共）

★本誌は斯界の最高峰の柳誌★内容の充実と誌代の低廉は
本誌の誇りとするところ★現柳壇へ幾多の名家を送り出し
た本誌は貴方が柳壇への登龍門として選ぶべき最良のもの
である。敢えて購読を薦む。（切手代用可）

大阪市住吉區万代四五丁目廿五番地

入門も奥義も

「川柳雜誌」から

発行所 川柳雜誌社

電話住吉 六〇八一番
振替大阪七五〇五〇番